

名大醫學部學友時報

2026 5

目 次

1. 最終講義	豊國 伸哉 (2)	6. 第 10 回名大ネットワークキャリアセミナー	
	松下 正 (3)	オンライン開催報告 (11)	
	室原 豊明 (4)	7. 名古屋大学医学部附属病院 診療体制一覧表 (1) (12)	
2. 臨床教授のひとこと	成瀬 友彦 (5)	8. 令和 8 年度 (2026 年) 首都圏支部総会 (15)	
3. 学術欄	永橋 昌幸 (6)	9. ご寄稿のお願い	
4. 会員寄稿	櫻井 武 (8)	10. 第 117 回名古屋大学医学部学友大会のご案内 (16)	
5. 読書ノススメ	村松 秀城 (10)	11. 編集後記	



オーストリアの世界文化遺産、ハルシュタット

最 終 講 義

私にとって勇氣ある知識人とは何か

—鉄が語る発がん機構—

病理病態学講座 生体反応病理学分野 教授

とよくに しんや
豊國 伸哉

2026年3月13日、名古屋大学医学部において、私の最終講義「私にとって勇氣ある知識人とは何か—鉄が語る発がん機構—」を行いました。多くの同窓生、学生、若手研究者、共同研究者、そして日頃支えてくださった皆様にお集まりいただき、これまでの歩みを振り返る貴重な時間となりました。

私は鳥根県松江市に生まれ、各地を転校しながら育ちました。研究者であった父の影響もあり、幼い頃から「自然の仕組み」に強い興味を持っていました。京都大学医学部に進学し、病理学という学問に出会ったとき、「形態は最初の仮説である」という言葉に衝撃を受けました。分子は後から追いつく。形態は嘘をつかない。この信念は、その後の研究人生を通して私の指針となりました。

若い頃に取り組んだテーマは金属毒性でした。当時は決して華やかな分野ではありませんでしたが、生命にとって本質的な現象であり、病理学的に「見える」研究であると信じて続けました。その中で鉄という元素に出会います。鉄は生命に不可欠でありながら、強い毒性も持つ。この二面性が発がんの理解に重要であると考え、鉄による酸化ストレス、脂質過酸化、DNA損傷の研究を進めてきました。

Fe-NTA腎発がんモデルを通じて、急性傷害、再生、耐性獲得、そして発がんへと至る連続した過程を明らかにできたことは、病理学の力を再認識させるものでした。その後、脂質過酸化産物の可視化や8-OHdGの検出など、形態と分子を結びつける研究を進めました。やがて「フェロトシス」という概念が登場しましたが、私にとってそれは突然の発見ではなく、長年観察してきた現象に名前が与えられた瞬間でした。研究は流行を追うものではなく、現象を追いつけるものであると実感しました。

名古屋大学に着任してからは、医学・工学・理学の融合による新しい研究環境の構築にも力を注ぎました。特に低温プラズマ研究は、鉄・酸素・ラジカルを同時に扱うことができる新しい手段として、フェロトシスの制御やがん治療への応用につながる可能性を示しています。理論から社会実装へと進むこの挑戦は、多くの若手研究者とともに歩んできた道でもあります。

教育において私が大切にしてきたのは、知識や技術よ

りも姿勢です。現象を自分の目で見ることで、再現性を重ねること、流行に依存しないこと、そして自ら問いを続けることです。地味なテーマであっても、思想があれば世界に届く。研究はマラソンであり、同時にオセロのように一手で局面が変わることもあります。

これまで博士48名、修士課程を含め多くの学生が巣立っていきました。彼らがそれぞれの場所で活躍している姿を見ることが、何よりの喜びです。研究は個人の問いから始まり、環境がそれを育て、やがて次世代へと受け継がれていきます。

最後に、私が本当に伝えたかったことは、「勇氣ある知識人」であってほしいということです。流行や評価に左右されるのではなく、自分の目で見た現象を信じ、新しい領域に踏み出してほしい。科学は未完成であり、すべては途中経過です。次の問いを生み出し続けることこそが研究の本質だと思います。

これまでの研究人生は、多くの出会いによって支えられてきました。共同研究者、教室員、学生、国内外の学会の仲間、そして家族に心から感謝しています。この場を借りて深く御礼申し上げます。今後も、次世代の研究者が自由に挑戦できる環境づくりに微力ながら貢献していきたいと考えています。



最 終 講 義

最終講義を終えて：輸血部は“止血部”たれ！

～安全な医療と出血に対する輸血療法～

輸血部 教授

まつした
松下ただし
正

1985 年に名古屋大学医学部を卒業し、1988 年の大学院入学以来、約 33 年間にわたり本学で臨床、教育、研究に携わってまいりました。この度、2026 年 3 月をもちまして定年退職を迎えるにあたり、「出血に対する輸血療法」と題して最終講義を行わせていただきました。紙面をお借りして、講義の狙いと若い先生方や学生の皆さんへのメッセージを要約してお伝えいたします。

【研究の歩みと J-THReC】

私の研究者としての歩みは、血液内科を基盤とした血栓止血学の領域から始まりました。難聴など複数の先天異常を伴う謎の巨大血小板症「May-Hegglin 異常症」の原因遺伝子の発見や、アンチトロンビン欠乏マウスの致死性とそのレスキュー、新規疾患「アンチトロンビンレジスタンス」の発見など、未解明な病態に挑んでまいりました。ライフワークとなった von Willebrand 因子の解析や血友病の病態解明は、現在「血栓止血研究コンソーシアム (J-THReC)」へと引き継がれ、全国の未診断の出血・血栓性疾患をゼロにするというミッションのもと、多施設共同の遺伝子解析ネットワークとして次世代のメンバーによって力強く発展しています。

【組織の DNA としての「安全文化」の醸成】

また、副病院長・病院長補佐として、病院の品質と安全文化の確立にも注力いたしました。2019 年には国立大学病院として初の JCI (Joint Commission International) 認証を取得し、2024 年に 2 度目の更新を果たしました。3,000 人の職員が結束し、組織の DNA として「安全文化 (Culture of Safety)」を醸成できたことは大きな誇りです。さらに、院内における「血栓予防・出血対策ワーキンググループ」を立ち上げ、多職種連携による電子カルテの休薬アラート機能の実装など、属人的な判断を排除したエビデンスに基づく安全基準を確立しました。

【「出血に対する輸血療法」と皆さんに伝えたいこと】

講義のメインテーマとした「出血に対する輸血療法」について、皆さんに伝えたい最大のメッセージがあります。かつての輸血療法は、医師の経験則に基づき、しばしば不適切な使用が行われることもありました。私は日本輸血・細胞治療学会の理事長として、科学的根拠 (EBM) に基づいた血液製剤の使用ガイドラインの策定を牽引し、国の「血液製剤の使用指針」の大改訂に携わりました。

医療とは、明確な目標を設定して行うものです。出血

に対する輸血療法においては、以下の原則を胸に刻んでください。第一に「正しい診断」を行うこと。第二に「目標を設定した輸血療法」を行うこと。そして、「不要な輸血をしない」こと。いわゆる“おまじない”や“帳尻合わせ”の輸血は決して行ってはなりません。大量出血に対しては、希釈性・消費性凝固障害、低体温、アシドーシスといった悪循環をいかに早く断ち切るかが重要です。そのためには、早期からのフィブリノゲン補充や適切な血漿・赤血球比の維持など、止血能を考慮した輸血が不可欠です。この点、私の中でびったり来る言葉として、先輩に教わった「輸血部は“止血部”たれ！」があります。血液製剤は単なる「補充」ではなく、「止血」という明確な治療目標を達成するための武器なのです。

【結びに】

血友病などの先天性出血性疾患の治療も、現在ではバイスペシフィック抗体、凝固リバランス療法、遺伝子治療などの非補充療法が目覚ましい進歩を遂げています。医療は日々進化し、皆さんが活躍する未来には更なる変革が待っているでしょう。常に科学的根拠を求め、患者さんの安全を第一に考える姿勢を忘れないでください。在職中、ご指導・ご協力を賜りました恩師の先生方、血液・腫瘍内科、輸血部・検査部のスタッフ、看護部、事務部をはじめとする全ての関係者の皆様、そして私に多くのことを教えてくださった患者さんに心より深く感謝申し上げます。名古屋大学医学部の益々のご発展を祈念いたしまして、退任の挨拶とさせていただきます。



最終講義

心臓血管研究の醍醐味

病態内科学講座 循環器内科学分野 教授

むろはら とよあき
室原 豊明

名古屋大学医学部・学友会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。学友会時報に「最終講義」要旨寄稿の機会をいただき、誠にありがとうございます。少しでも若手の方々に循環器研究の魅力を知ってもらいたいという願いで、このような講演タイトルにしました(図)。

私は熊本県阿蘇郡小国町の出身です。5キロ離れたところに北里柴三郎先生の生家がありました。しかし私の故郷はダムに沈むことになり、家族は近隣の分県日田市に移住を余儀なくされました。その後熊本大学医学部に入学しましたが、循環器系に興味を抱くようになり、卒後は心臓外科か循環器内科を迷いましたが、ちょうど冠攣縮研究の世界的権威であられる泰江弘文先生が循環器内科の初代教授として着任されたことから、循環器内科に入局しました。大学院では「加齢に伴って冠動脈の内皮機能が低下する」というのが私の学位論文になりました。大学院卒業後は、済生会熊本病院で急性期を含む臨床と研究で忙しい日々を過ごしました。

1993年より米国フィラデルフィアのJefferson医科大学大学生理学講座に留学しましたが、ここでは主に心筋虚血再灌流傷害抑制の研究に勤めました。そこそ論文も出て2年が経とうとしていた時に、ボストンのTufts大学のJeffrey Isner教授がやってきて「遺伝子治療による血管再生」の講演をされました。これに大変感銘を受け、ラボを移籍することにしました。Tufts大学では、当時浅原孝之先生を中心にEPC (endothelial progenitor cell) 発見の研究を行っており(Science1997)、私もそこに参加する事ができました。その他にもVEGF-NO相互作用(Nat Med)、VEGF血管透過性(Circulation)や、NO-血管新生(JCI)などの論文を発表することができました。1997年に義兄の勧誘もあって、久留米大学医学部第三内科に帰局しました。久留米でも、血管再生や内皮機能、NOなどの研究を継続し、特に自己骨髄細胞移植による血管再生療法を立ち上げ、他大学と共同でLancet誌などに報告する事ができました。この成果で当時政府のミレニアムプロジェクト再生(永井良三先生班長)にも参加させていただきました。

2002年より、縁ございまして名古屋大学病態内科学講座・循環器内科学にお世話になりました。私は愚直に「血管再生」というKeywordを大黒柱に保ちつつ、それに関連する研究を枝葉のように伸ばして来て今日に至ります。自己骨髄細胞・iPS細胞・遺伝子治療を始め、皮下脂肪由来間葉系前駆細胞(ADRC)を用いた血管再生療法の基礎・臨床応用(TR)研究、リンパ管・心筋再生に関する基礎研究、VEGFなどの成長因子に関する研究などです。臨床研究部門は各部門の研究責任者を決め、比較的自由にテーマ決めていただきました。特に海外留学経験者は、その経験を最大限に活かせるよう私はできるだけサポートす

る側に立ちました。それは自分自身が久留米大学でそうさせてもらったからです。まさに「自由闊達」の方が良い成果が生まれます。名古屋大学循環器内科からは、群馬大学循環器内科、三重大学生理学、藤田医科大学循環器内科、愛知医科大学循環器内科、自治医科大学環境予防医学などに主任教授を輩出できました。研究志向も旺盛で、循環器内科開設当初からコロナ禍中も今も比較的留学志向のある先生が多く、常時5名くらいの先生方が海外のどこかで頑張っているという状況でした。関連病院も大きなものだけでも40くらいあり、毎年30人以上が同門会に入会しないと維持できない規模ですが、私の在任中には毎年平均25人くらいが入局していただけました(つまりは慢性的な人材不足です)。

最後に、動く臓器の循環器分野の研究は多様で興味深いです(図)。学生さんや若い先生方には、是非ともこの道を志していただきたいです。24年間弱名古屋大学に在籍させていただきました。この間、多くの先輩・同輩・後輩の学友会の先生方に語り尽くせないほどお世話になりました。本当にありがとうございました。

心臓血管研究の醍醐味

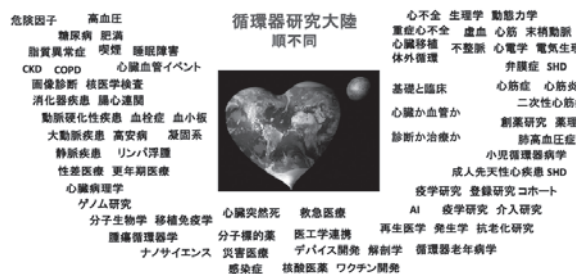


図 循環器分野研究の多様性





臨床教授のひとこと



AI に負けない医師とは

春日井市民病院長

なる せ
成瀬ともひこ
友彦

(H元年卒)



『ミャクミャクを 妖怪辞典で 探す父』ゲゲゲの鬼太郎でおなじみ、水木しげるさんの故郷、鳥取県境港市で毎年開催されている、妖怪を題材に世相を表現する「妖怪川柳コンテスト」。今年の大賞作品がこの句です。うまいですね。しかし、AI が作った川柳と人間が作った川柳との見分けがつかないことを理由に、今回で終了することが決まりました。主催者によると、昨年あたりから同じような川柳が何作も届くようになり、観光協会が実際に AI にキーワードを入れてみたところ、全く同じ川柳が完成したそうです。

境港観光協会の会長さんは『残念ながら 20 回で終わることになりました。その引き金になったのは AI。AI の作品が非常に増えてきた中、苦渋の選択ですが今回で終わることにしました。正直、私たちの目では AI で作ったものなのか人が作ったものなのか、容易に判断できません』

確かに最近の AI の進歩には目を見張るものがありますが、医療界にも AI が進出してきています。例えば各種画像読影などは AI 化がそこまで迫っていますし、診断学も日進月歩の変革が予想されます。我々内科医は診断学が肝（きも）ですから、職が奪われるのでは？と心配してしまいます。

私が医師になって 3 年目の時に ALS（筋萎縮性側索硬化症）の患者さんを担当することになりました。今から 30 数年前は医師が充足しておらず、私が勤務していた病院も神経内科医が不在でしたので、専門外の神経難病を担当することも珍しくありませんでした。その患者さんは 50 歳代の男性で、180cm 以上の高身長ながら体重は 40 kg 前後とやせ細り、寝たきり状態でした。ALS により呼吸筋が徐々に麻痺し呼吸が十分でできず苦しい、という主訴での入院でした。しかし本人、家族ともに人工呼吸器は付けないという強い意思表示があり、いわば看取りのための入院でした。酸素投与程度しか治療がない中、奥さんと娘さんが交代で熱心に付き添いをしていました。しかし 2、3 週間過ぎた頃から二人に疲労の

色が見え始め、少し口調がきつくなったように感じていました。一方私も最初は呼吸法や病気について丁寧に対応していましたが、治る見込みのない病気です。『先生どうしてこんなに苦しいんですか？』『どうしたらもう少し楽になりますか？』と答えの出ない質問を毎日繰り返され、徐々に回診に行くのがおっくうになり、多忙なふりをして、できるだけ短時間の回診で終わるようにしていました。医師は良くなる患者さんのところには何度でも回診に行きたくなりますが、良くならない患者さんの部屋には足が遠のくものです。そんなある日、そそくさと回診を終え部屋を後にしようとした時『成瀬先生！』と呼び止められました。私は自分の診療態度を責められるのでは、とドキッとしたのですが、『成瀬先生、私は先生と話している時が 1 日の中で一番楽しいんです。先生が来てくれるのを朝からずーっと待っているんですよ』と告げられました。私は激しい動悸と全身から汗が吹き出てくるのを感じ、体が熱くなりました。私のような 3 年目の若僧の回診をこんな気持ちで待っていてくれたのに、自分はなんてひどいことを考えていたのか、土下座して謝りたい気持ちでした。以後私は朝に夕に患者さんのもとを訪れ、ベッドサイドに腰かけてゆっくり話をするのが日課になりました。心なしか愁訴も減った気がしましたが、ほどなく患者さんはお亡くなりになりました。後日、奥様から『夫の主治医になってくださり、本当にありがとうございました』という丁寧なお手紙を頂きました。お礼を言いたいのはこちらの方で、こんな経験の浅い医者を主治医に認めてくださり有難うございました、と心の底から思いました。

患者さんの心の CRP を感じ、良くならない患者さんであっても熱い気持ちをもって接する、これは AI にはできないことだと思います。医師は優しすぎてダメなことはありません。若いうちから人を好きになること、様々な知識を得、経験をつむことを心がければ、AI に負けない医師に成長できると思っています。

第117回 名古屋大学医学部 学友大会のご案内

向暑の候、皆様にはお変わりなくご活躍のことと存じ、心よりお慶び申し上げます。

さて、このたび今年度の学友大会委員長を仰せつかり、現在、多くの先生方と協議を重ねながら準備を進めております。今回も多数の会員の皆様にご参加いただき、盛大な会となりますよう念じております。

つきましては、万障お繰り合わせのうえ、ぜひご参加くださいますようお願い申し上げます。

2026 年 5 月

第 117 回名古屋大学医学部学友大会 委員長 佐藤 公治
(日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 院長/名古屋大学整形外科同門会 会長)

日 時

2026 年 10 月 10 日 (土) 14 時 15 分～

場 所

名古屋観光ホテル 2 階 曙の間

〒460-8608 名古屋市中区錦一丁目 19 番 30 号

TEL 052-231-7711

参加費

一般会員 16,000 円
医員 (研修医を含む)、大学院生 8,000 円
会員のご同伴者 8,000 円
非会員 17,000 円

申込期間

令和 8 年 8 月 31 日 (月) まで

行 事

1. 総 会

2. 記念講演

講師 福岡 伸一 先生

京都大学卒および同大学院博士課程修了。ハーバード大学研修員、京都大学助教授などを経て、現在、青山学院大学教授・米国ロックフェラー大学客員教授。

<https://www.fukuokashinichi.com>

演題：いのちの動的平衡 (仮題)

3. 懇親会

- ・ジャズバンド演奏 WHY ジャズ楽団
塩之谷香先生 (塩之谷整形外科 理事長)
- ・名古屋大学応援団演舞



【一筆啓上お願い】

大会誌に一筆啓上欄を設けております。この企画に、関連病院、支部、クラス会、医局よりご賛同を賜りますようお願いいたします。

編集後記

新緑の間を吹き抜ける風が心地よい季節となりました。新年度が始まってから早くも 1 ヶ月ほどが経ち、新歓の賑わいも少しずつ落ち着きを見せています。新入生の姿を見ていると、自分自身の学生生活について改めて考える機会が増えたように感じます。昨年度後期は基礎医学セミナーで研究室に所属し、一つのことに腰を据えて取り組む時間を多く持つことができました。しかし現在は、講義や部活動、研究、学外での活動など様々なことを並行して進める日々を送っています。目の前のことに集中したいという気持ちと、学生のうちにしかできない経験を少しでも多く積みたいという気持ちの間で、日々模索を続けています。限られた学生生活の時間の中で、一つひとつの経験を大切に積み重ねていきたいと思います。

(村松 舞奈美)

部 長	梶山 広明	6 年	小野 瑞稀	阪口 竜佑	松井のぞみ	森本 崇嗣
委 員	芳川 修久	5 年	安藤 優里	坂本 鈴奈	チーフ 相地 竜壺	味村 柊哉
	玉内 学志	4 年	天野 祥汰	佐野 文哉	橋元万由子	村松舞奈美
学友会事務局	中島 千夏	3 年	櫻井あんり	高木 彰吾	原田理紗子	平田 紗菜

【時報部の e-mail アドレスのお知らせ】

本時報に対するご意見、ご感想、情報等は、numed.jiho@gmail.com へお寄せください。
どうぞよろしくお願い申し上げます。

発 行 所 〒466-8550 名古屋市中区鶴舞町 65
名大医学部学友会
編集発行人 時報部長 梶山 広明
印 刷 所 名古屋市中区千代田 5-11-16
株式会社山誠社

購読料 (年 7,000 円 会費に含む) 毎月 22 日発行
学友会 振替口座 (00880-7-3838)
電 話 (052) 744-2512 (直通)
F A X (052) 741-7676
メー ル gakuyuukai@med.nagoya-u.ac.jp